慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	"local and outsider" : フランク・マツラ (1873-1913年) の写真
Sub Title	"local and outsider" : Frank S. Matsura and his photography
Author	加藤, 有佳織(Katō, Yukari)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2020
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.119, No.1 (2020. 12) ,p.92- 98
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	巽孝之教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01190001-0092

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

“local and outsider”
── フランク・マツラ（1873-1913年）の写真

加藤　有佳織

谷口ジロー『天の鷹』は、明治維新後にアメリカ合衆国へ渡った元会津藩士の相馬彦三郎と四方津万蔵が、ワイオミングの山間でオグララ・スーの戦士クレイジー・ホースと出会い、スー族とともに生きる姿を描く。それぞれにスカイ・ホークとウィンズ・ウルフという名を与えられ、1876年のリトル・ビッグホーンの戦いに貢献し、1877年にクレイジー・ホースが亡くなってからも抵抗を続け、英領カナダへと向かったと描かれる。土地条約をめぐる先住民と合衆国陸軍の攻防、先住民の部族間の対立に伴走するのは、ランニング・ディアというサン・アーク・スーの女性とその娘の物語である。ランニング・ディアは、村ごと焼き討ちにあい、交易所の雑役に使われていたが逃げ出し、森のなかで倒れていたところを相馬彦三郎に救われ、生まれたばかりの娘はサクラと名付けられた（42）。34年後、サクラは合衆国とカナダの国境に近いワシントン州オカノガンのインディアン居留地にいた。その地でサクラは肖像写真を撮る。カメラマンは「日本人の写真家フランク・マツウラ」で、サクラは彼に名前の由来を尋ねられる（284）。日本からやって来たスカイ・ホークとウィンズ・ウルフについて、母について、訥々と語り始める場面で作品は結ばれ、『天の鷹』という元会津藩士たちの “going native” 物語の結末に、ネイティヴになった人物がもうひとり登場することになる。本小論では、この「日本人の写真家」について、そして彼が1903年から1913年のあいだに撮影したおよそ2500点の写真が持ちうる意味について考えてみたい。

この日本人写真家フランク・マツラとは、松浦栄のことであるとされる（姓のカタカナ表記には、マツウラやマツーラなど、ゆれがある。ここでは後年の表記

にならってマツラとする)。日本政府の旅券発行記録、ワシントン州オカノガンに残されていた写真の署名、名刺の表記、ノリコという女性から松浦栄へ宛てた二通の手紙などから、ジョアン・ローが特定した。ローは、長崎の松浦家とのつながりを推定してもいる(Roe, "Preface" 5-6)。1901年にタコマおよびシアトルを目的地とする旅券申請をした書類には「27歳」や「家長 (master of the family)」とあることから、マツラがオカナガンでは年齢を変えていたことや既婚者であった可能性も示唆する (Roe, "Frank" 15)。その後、写真家の栗原達男によるリサーチが、松浦栄のバックグラウンド詳細を明らかにした。平戸を治めた松浦家の系譜であり、1873年に松浦安の長子として生まれたが、幼くして父母と祖母を亡くし、1886年に父方の叔父にあたる岡見正に引き取られた(栗原『フランク』43-47)。小学校教育や女子教育に携わっていた岡見がキリスト教徒であり、マツラも1888年に洗礼を受ける。栗原は、牧師であった木村熊二(1845-1927年)から、マツラが写真や英語を習ったのだろうと述べている(『フランク』60-68;『100年』192)。木村は1870年に森有礼に随行してアメリカへ渡り、ニューブランズウィックの改革派教会にて牧師に叙任されている。さらに、19世紀日本写真における先駆的存在である下岡蓮杖(1823-1914年)に学んだ一人でもあった。マツラがアメリカへ渡った時点ですでに英語に堪能であり、写真技術も持っていた理由として説得力があると思われる。

マツラがアメリカへ渡った詳しい経緯を知る手がかりは今のところまだ発見されておらず、1901年に旅券申請してからシアトル滞在とアラスカ旅行を経て、コンコヌリに現れるのが1903年のことである。ローによれば、コンコヌリのエリオット・ホテルが調理補助と洗濯の係を募集し、シアトルにいたマツラだけがただ一人応募してやって来た。ホテルでの仕事のかたわら、マツラは開拓地の風景を写真に収めていった。1904年には日露戦争従軍のため町を発つが、2週間ほどで戻ってくる。日本へ向かう船にうっかり乗りそびれてしまったと語ったと伝えられるが、実際のところは分からない(Roe, "Frank" 14-15)。その後1907年に、コンコヌリから30kmほど離れたオカノガンへ移り、そこで写真店を始め、オカノガンの風景写真やポストカード、住民の肖像写真などを手がけた。発展する町のさまざまな表情をとらえた彼の写真は、オカノガンのコミュニティ全体で共有されるだけでなく、町を体現する作品として評価された。1909年にシアトルで開催されたアラスカ・ユーコン・太平洋沿岸万博の展示に採用されたとも

に、1911年にはグレート・ノーザン鉄道の宣材写真として使用されるなどした（Roe, “Frank” 19）。しかし1912年に病を得て写真店をたたみ、1913年6月にマツラはその生涯を終える。タコマの日本領事館に問い合わせると親類縁者の届け出はなく、現地で埋葬することとなる。オカノガンの住民たちとあたたかな交流を持っていたマツラの葬儀は、町をあげて最大規模のものとなったことを、地域紙『オカノガン・インディペンデント』1913年6月20日付の記事は伝えている（Roe, “Frank” 21-22）。

アメリカへ渡る経緯や彼の置かれていた経済的・社会的状況には不明瞭な部分が多い（たとえば彼が当初携えていたカメラは、ローによると、ノリコという女性からの手紙のなかで「政府」が支給したものと書かれているが、詳細は不明である）ものの、マツラがコンコヌリやオカノガンの風景と人々を写した作品がさまざまな解釈を呼び寄せることは確かである。マツラが亡くなってから、写真や乾板は友人であったウィリアム・コンプトン・ブラウンが保管していた。当地の判事を務めていたブラウンの死後1964年に、彼を世話していたエヴァ・ウィルソンからオカノガン郡歴史協会へ寄贈され、1975年に博物館開設のためにそれらが再発見され、一部が展示された。その展示でマツラの存在を知ったローが調査をまとめ、1981年にマツラにかんする解説とともに、歴史協会に保管されていた乾板を現像した写真集を出版した（Roe, “Preface” 6）。マツラの作品をいわば再発見したローは、マツラの写真は「すぐれた作品であり、北アメリカ最後のフロンティアの暮らしの記録として歴史的価値がある」と評価している（Roe, “Frank” 13）。オカノガンは、ゴールドラッシュの夢に破れ北上したH・F・スミスが1860年に定住して果樹園を始めたことで、農業地としての可能性が見出された比較的あたらしい開拓地であった（Morgan 9, 11）。そこに町が形成される過程を写し取っていることにローは史料としての重要性を見ている。

ローの述べる歴史的重要性に加え、レイナ・グリーンによる論考以後、マツラ写真の批評性が指摘されている。グリーンは、牧場主やカウボーイ、通訳として暮らしていた先住民の肖像写真は、同時代の先住民や西部の表象において主流を占めていた、滅びゆく先住民を写真にとらえるという態度にみちた作品とは一線を画すものであり、白人入植者の影響を受けながら、異なる生活様式に適応して生きていることを物語ると論じる（52）。グレン・M・ミムラは、この点に加え、マツラの風景写真にも注目し、町並みや鉄道といった開発・変容をとらえる

ものと、不変にも思われる自然を写すものに大別されるそれらが、フレデリック・ジャクソン・ターナーが概念化した西部、あるいは産業化の神話に回収されることのない、具体的でローカルな多様性を体現すると読み解いている（689）。

肖像写真や風景写真はもちろん、マツラにはスタンプ写真も残っている。写真店の経営が思わしくなく、副業を考えていた1908年、新聞で調理師としての職を募集したが、2週間後に資金援助があった。その援助によりスタンプ写真用カメラや肖像写真用カメラなどをあらたに購入し、副業の必要はなくなったという（Roe, “Frank” 18-19）。栗原は、送金元は叔母匹田かえであったと指摘している（『100年』192）。そして以後、スタンプ写真が彼のレパートリーに加わる。画面を複数コマに分割した写真で、1コマずつ異なるポーズをとり、ときにマツラ自身も写り込むことがあった。シプ・ワンは、マツラが写真の写実性とともに作為性を十分に理解していたと指摘し（11）、その好例としていくつかのスタンプ写真をあげている。「マツラとノーマ・ディラボウ、スタジオ写真」（1910年頃）というカップルを演じるもの、「マチルダ・シャラー、マツラ、友だち」（1911年頃）という親密な女性たちと二人をのぞく男性たちを演じるもの他2点はいずれも非常にカジュアルかつコミカルな作品で、カメラがあることを意識しながらポーズをとり、ケンカをしたり腕をからめたりキスをしたりするコマが並ぶ。それらの動作は演じられていると同時に、しかし、「ある種の『真実』」をとらえているとワンは述べる（31）。西部におけるジェンダーやセクシュアリティの多義性は、西部開拓史・西部表象において見落とされてきたが、これらの写真には規範的ではないジェンダーやセクシュアリティがのぞくのである。

当時の西部表象に対してマツラ写真が持ちうる批評性を、ミムラやワンは、彼が外国人として白人入植者よりも先住民に近似していたことに帰属させている（Mimura 688; Wang 33-34）。アメリカ合衆国と英領カナダの国境にほど近く、白人入植者たちの開拓地とコルヴィルインディアン居留地が近接するオカノガンという境界地帯で、マツラは「地元の人間であり余所者であるという矛盾をはらむ特異な立場」にあり、「たしかに人々に愛されていても、人種という観点において他の白人入植者とまったく同じ意味で地元の人間になることはできない余所者であり、この事実によって彼はこの地域の先住民に親近感（affinity）を抱くことになった」のである（Mimura 688）。「サム・マイケル、マック・フェイヴェル、ジョージ・ヘインズ、フランシス・フェイヴェル」（撮影年不明）や「イン

ディアン・カウボーイと町の男」（撮影年不明）といった肖像写真は、ミムラの指摘するとおり、エドワード・S・カーティスによる写真と異なり、写る先住民たちとマツラは心安い関係を結びながら「同じ世界を共有している」ことがうかがわれる（Mimura 704）。ワンはさらに、「マツラとスーザン・ティメント、スタジオにて」（1912年頃）や「マツラとセシル・チルウィスト嬢」（1910年頃）といた先住民女性とマツラを写す作品を取り上げ、異人種間結婚の仮想を読み込んでいる（33-37）。たしかに、ただ一人の日本人としてオカノガンにいかに深く根をおろしていても、帰化を認められていないアジアからの移民であったマツラは、「マイノリティであるとともに、合衆国生まれであり生まれた場所から疎外されている」先住民と親和性を持ち得たのかもしれない（33）。そのような立場が、白人入植者による発展を自明の前提とするような西部表象からの距離を生んでいた。

最後に少し考えてみたいのは、日本からアメリカへの移民の歴史のなかで、マツラはどのような位置を占めるかということである。移民一世の間国家性を詳解する東栄一郎は、「アメリカ合衆国西部は、19世紀末から20世紀初期の移民の問題をめぐって、アメリカの西漸運動と日本の帝国主義が出会うボーダーランドにも等しい場所であった」と指摘している（10）。さまざまな位相があるなかで、1885年から1907年まで、出身階級にゆるやかに対応するかたちで、重商主義的な拡張論、日本版のマニフェストデスティニー、そして努力と成功のイデオロギーが日本からの移民のなかに醸成されていたと東は分析している（20）。興味深い事例のひとつが、1887年に発行された渡米案内で、「ヨーロッパの者にとってそうであったように、日本にとっても北アメリカはフロンティアであってしかるべきだと主張」していた（23）。「あらたな日本」や「第二の日本」をつくるという日本帝国の展望は、アメリカ西部に形成されつつあった日系移民社会においては、アメリカ国内の人種や階級をめぐる制約のなかでの実現が模索されていた（23）。このように、西部に生まれていた日系移民社会が、日本の帝国主義的拡張の担い手でありつつ、アメリカ西漸運動に参加する一員として自己形成していたとすれば、マツラの存在はどのような意味を持ち得るだろうか。シアトルでは日本人移民名簿に名前がないことから（栗原『フランク』84）、日系移民のコミュニティとのつながりはおそらく希薄であっただろう。アメリカの最後のフロンティアに移り住んだマツラは、日系移民社会にとっても同胞でありつつ「余所

者」だったのではないか。そんな彼が、日露戦争時には時局や日本について訊ねられては答え（Roe, “Frank” 15）、反日感情がうねる太平洋岸地域のなかの小さな飛び地のように、コンコヌリやオカノガンというコミュニティで友好的な関係を築いたことは興味深い。もし、マツラにかんして日系移民のコミュニティとのつながり、渡米の経緯にかんしてさらなる掘り起こしができれば、アメリカ西部表象の歴史のなかで、「地元の人間であり余所者であるという矛盾をはらむ特異な立場」から批評性を持つと同時に、太平洋沿岸の日系移民史にも微妙なニュアンスを加え得るのではないだろうか。

引用文献

Azuma, Eiichiro. *Between Two Empires: Race, History, and Transnationalism in Japanese America*. Oxford UP, 2005.

“The Cowboy and the City Dude.” Roe, *Frank Matsura*, p. 34.

Frank S. Matsura Image Collection. Washington State University Libraries Digital Collections, https://content.libraries.wsu.edu/digital/collection/matsura/search.

“Mathilda Schaller, Matsura and Friends.” 1911. Frank S. Matsura Image Collection, pc035b1f16n100, https://content.libraries.wsu.edu/digital/collection/matsura/id/222/rec/174.

“Matsura and Norma Dillabough Studio Portraits.” 1910. Frank S. Matsura Image Collection, pc035b1f01n21, https://content.libraries.wsu.edu/digital/collection/matsura/id/188/rec/753.

“Matsura and Susan Timento Pose at Studio.” 1912. Frank S. Matsura Image Collection, pc035b1f01n99, https://content.libraries.wsu.edu/digital/collection/matsura/id/714/rec/755.

Mimura, Glen M. “A Dying West?: Reimagining the Frontier in Frank Matsura’s Photography, 1903-1913.” *American Quarterly*, vol. 62, no. 3, September 2010, pp. 687-716.

Morgan, Murray. “Introduction” Roe, *Frank Matsura*, pp. 9-12.

Roe, JoAnn, editor. *Frank Matsura: Frontier Photographer*. Madrona, 1981.

——. “Frank Matsura.” Roe, *Frank Matsura* pp. 13-22.

“Sam Michel, Mac Favel, George Haines, Francis Favel.” Roe, *Frank Matsura*, p. 137.

Wang, Shipu. *The Other American Moderns: Matsura, Ishigaki, Noda, Hayakawa*. Penn State UP, 2017.

栗原達男『フランクと呼ばれた男 ── 西部の写真家「松浦栄」の軌跡』情報センター出版

局、1993年。
――.『100年の残影――西部の写真家・松浦栄』彩流社、2011年。
谷口ジロー『天の鷹』双葉社、2002年。